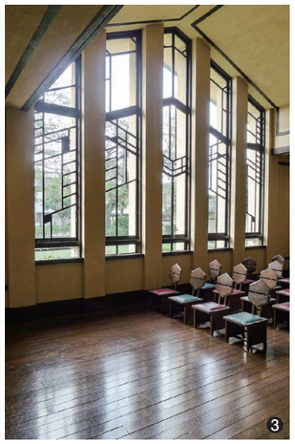
歴史的ツーバイフォー建築物を訪ねて―明治～昭和初期―

第一回

# ライトの手掛けた建築・自由学園明日館（みょうにちかん）

内田 青蔵（神奈川大学工学部建築学科教授）



①寝殿造のように中央棟を北に置き、広場をコの字型に囲い込む配置。軒高が低く水平線が強調されている。
②内部は床の高さを数段ずつ変えたスキップフロア構成。階段には大きなトップライトが設けられ、光が差し込む。
③前庭に面するホールの大きな連窓。ライトは高価なステンドグラスを使用する代わりに、木製の窓枠や桟を幾何学的に配することで工費を抑えた。
④外光を巧みに取り込み、幾何学的な装飾を用いて変化に富んだ内部空間が創出された食堂。

## 現代建築の巨匠F・L・ライトが日本に残した貴重な代表作

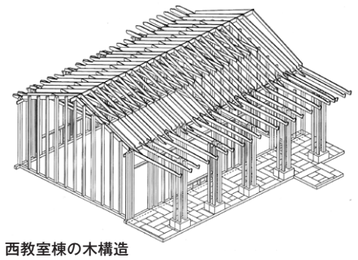
1967（昭和42）年にペーター・ブレイクの『現代建築の巨匠―20世紀の空間を創造した人びと』（彰国社）が出版された。そこにはル・コルビュジエとミース・ファン・デル・ローエ、そしてフランク・ロイド・ライトの3名の建築家が現代建築を創り上げた巨匠として取り上げられ、事績とともに建築思想と代表建築が紹介されていた。ずいぶん昔のことだが、大学入学後に先輩から勧められた一冊で、特に心に残ったのがライトだった。日本に複数の作品を残していたからである。しかも、その活躍していた時代が1910年代から20年代のまさに、日本における近代建築の勃興期だったからだ。しかし、ライトが日本で手掛けた代表作品である帝国ホテルはすでに取り壊され、玄関ホールの一部が愛知県にある明治村に移築保存されているだけだった。

だが、日本にはほかにもライトの魅力的な作品が現存していたことを知った。それが、今回取り上げる自由学園明日館だ。

1997（平成9）年、重要文化財となった指定説明書には、「建物の軒高を低く押さえて水平線を強調した造形、内外の各部要素の高さを変えた変化を持たせた空間構成」、そして広場を囲い込むような伝統的な寝殿造風の建物配置に特徴があり、そのデザインは「プレーリーハウス」と呼ばれるライトの作風を示していると記されている。まさに、巨匠であるライトが生み出した個性的なデザインを鑑賞することができる貴重な建築という訳だ。

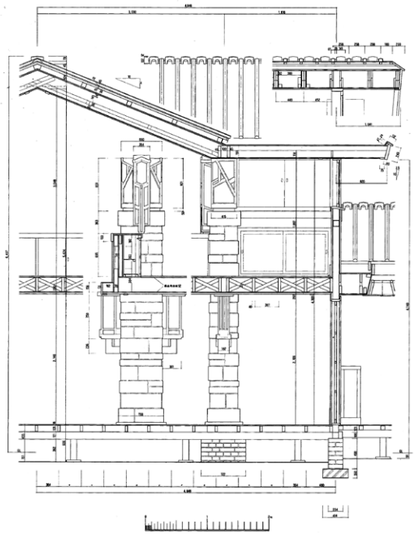
DATA

自由学園明日館
竣工年／1922（大正11）年～1925（大正14）年
※講堂は1927（昭和2）年
所在地／東京都豊島区
設計者／フランク・ロイド・ライト、遠藤 新



西教室棟の木構造

中央棟・西教室。明日館の工期は1921年～1925年だが、ライトが設計依頼された3ヵ月後にはまだ荒壁の残るこの教室で入学式が行われるほどの短期計画であった。



中央棟ホールの矩計詳細図

敷地の南側に建つ講堂。本館と調和するデザインで、小屋組と1階の床梁には、板材によるツーバイフォー構造が部分的に採用された。

図版出典：『重要文化財 自由学園明日館保存修理工事報告書』平成14年2月
（編集・著作／（公財）文化財建造物保存技術協会、発行／自由学園）

## 現在のツーバイフォー工法に近い構造が採用され空間表現と工法が表裏一体の関係

ところで、この指定説明書には触れられてはいないものの、もう一つ、日本にとって特筆すべき特徴がこの建物には内在している。それが構造形式だ。解体修理後の報告書によれば、「建物の基本的な構造は、現在の2×4工法と近い壁式工法」とある。実際、アメリカの枠組壁工法とは異なり、角材も使用されているものの、柱を繋ぐ桁はホール部分が約115×30㎜、東・西教室部分約150×30㎜、小屋の垂木は約150×30㎜といった板材を基本とした構造で、日本には存在しなかった極めて新しい工法といえる。その採用の理由は、施主である羽仁夫妻からの条件が短工期で、予算も限られていたためであったといわれている。これに加え、報告書には興味深い記述がある。ライトの建築空間の特徴として「空間を連続させて一体構造とする『有機的建築』」であり、「柱と梁の構造はあまり使用せず、間仕切壁・床・屋根を一体とする構造を用いていた」とある。解釈にもよるが、この壁式工法こそ、ライトの標榜していた空間表現に適していたともいえるのである。まさに空間表現と工法が表裏一体の関係にあり、ライトが自らの建築表現を実現するためには、壁式工法を用いるしかなかったともいえるようだ。

改めて、自由学園の建設経緯を見ると、1921（大正10）年3月に起工し、中央棟と西教室棟が大正11年に完成した。その後、東教室棟は1925（大正14）年に、1927（昭和2）年には講堂が続いて完成している。ライトは、1922（大正11）年7月、建物の完成を見ず、残りの工事は弟子の遠藤に委ねてアメリカに帰国した。当然だが、遠藤はライトの建築空間を実現すべく、ライト同様に枠組壁工法に近い工法を採用した。

現在、ライトが作り上げた建築は、今でもその魅力を失わず、人々を魅了する。その空間の誕生には、壁式工法の果たした役割が大きかったと考えることができるのである。